

一人ぼっちの僕

三浦 武



自己紹介

私はもう八十の坂を越しましたので、近頃の若い読者にはなじみがないと思うので、最初にちよつとだけ自己紹介をしておきます。

私は昭和二十二年九月から東京保育専修学校の講師となり、昭和四十九年まで二十六年半、児童心理学を担当しました。また昭和二十三年九月からは中野高等

保育学校（今の宝仙短大）の講師となり十八年間児童心理学を担当しました。米軍の空襲で一面の焼野が原となった高円寺の一角に、軍隊の馬小屋を解体した材木を使って幼稚園の建物を造り、その二階で、幼稚園の先生を養成する東京保育専修学校を再開した時私が教えた生徒は僅かに十七名でした。

私は卒業論文では幼稚園児の飽きの実験的研究をやりました。昭和十八年という太平洋戦争最中のことで

した。こういうわけで、「幼児の教育」には私は若い頃は随分関心をもって勉強しました。

父のイメージ・母のイメージ

さて、今回は私の幼い頃を振り返ってみて、私という人間が如何に形成されたかを考えてみようと思います。

私は大正八年に愛知県の豊橋市に生まれました。八人きょうだいの五番目の子どもでした。今日の少子化の時代から見るときょうだいの人数は多かつたけれど、戦前のきょうだいの数の平均は七人でしたからまあ普通だったわけです。

父のイメージとして今に残っているのは、父の肩車にのせてもらって、父が好きだったビリヤードに連れて行ってもらったことです。

おそらく二歳か三歳の頃のことでしょう。

母のイメージとして残っているのはきょうだい二、三人と一緒に風呂に入れてもらっている光景です。

母はいつも「なんとあらあね」と静岡弁でいついたのを覚えています。

そんなことは何でもないよという意味です。

健康な母は自信があつたのでしよう。少し無神経な方でした。

きょうだいの間では私はすぐ下の妹を何かといじめ、母にひどく叱られました。

これは私の愛情欲求、妹への嫉妬がそうさせていたのだとあとではわかりましたが、当時はとてもわかりませんでした。一番上の姉は八歳年上ですから、学校の勉強のことも姉がいろいろ教えてくれました。もう母親代わりの役割をしていたのでしよう。

祖母の家の二年間

母は丈夫な人でしたが、次々に生まれる子どもの世話が大変だったのか、私は小学校に入るまで二年間くらい、静岡県の西部の掛川の在ざいの母の実家に預けられました。大正の頃なので、そこに行くのにはテトテト

というラツパを鳴らして走る乗合馬車に乗って行きまして。

母の実家では私の祖母がとても可愛がつてくれました。その家には男の兄弟が四人いましたがもう就職したり大学生になって東京に出ていたりして、祖母は手があいていたのです。祖父は県会議員をしていたので、静岡に行くとき、帰りに必ず森永キャラメルをおみやげに買ってきてくれました。そのキャラメルの空箱を棄てないで大事にして私の部屋の隅に並べておきました。これは幼児のがらくた集めの現象でしょう。

一人ぼっちの僕

さて、小学校に入学するというので、豊橋の家に帰ってきましたが、近所の子は誰もなじみがありません。大正の終り頃はまだギャング・エイジ全盛の頃で、近所の子は集まって集団で遊び廻っていました。

鬼ごっこをしたり、こま廻しをしていました。私は仲間に入りたいたのですが、どうしても入れません。みんな

なが遊んでいるのをただ眺めているだけです。しかしボツンと立っているのも気はずかしいので、誰かと遊んでいるようなふりをしたりしていました。「想像の友達」と遊んでいたのです。これは本当に淋しい思いでした。

私の姉は近所の子とよく遊んでいたもので、その仲間に入れてもらいたかったのですが、女の子の仲間には男の子は入って行けませんでした。

その上悪いことに入学した小学校は本来の学区の小学校ではなく、隣の学区の小学校でした。だから学校に行くようになって、隣近所の子どもたちとは相変わらずなじみがありませんでした。これが私の原体験でした。この孤独感がその後の私の人生にいつもついて廻りました。感情、情緒に係した面がパーソナリティ形成の基本となります。

私が小学校に入学したのは大正十五年です。

小学校入学記念の写真をみると大部分の子はカスリのつつ袖の着物を着て、下駄をはいています。今から

思うと隔世の感があります。

さて、小学校に入ると、いろいろの勉強をすることに興味をひかれ、孤独感を味わわなくても済むようになりましたが、友達とわいわい騒いで楽しむということとはあまりありませんでした。からだを丈夫にするにはジョギングがいいと思って、朝早く、広場を一人で走っていたこともあります。やはり一人で走っていました。走っているのを人に見られるのが恥ずかしいので、人のいない所を一人で走っていました。中学に入ってから、人気のない川の堤防の上を一人で散歩するのが一番気持ちにじっくりくることでした。

思春期の初めの自我の誕生に伴う孤独感へと成長していったのでしょう。



学生相談と幼時体験

後年東京大学で心理学を専攻し、東京都立大学の助教授となり、臨床心理学を研究してきました。学生相談室長を兼務することになり、学生とエンカウンター・グループの合宿をするようになりました。エンカウンター・グループの合宿では自分の心の奥を開いて話し合います。それができる雰囲気を作るのが大切です。それがうまくいくと男子学生が涙を流しながら話をするようになります。こういうことは普段のキャンパスの中ではとても見られない体験です。エンカウンター・グループ合宿を体験した学生は卒業してもまた合宿に参加しました。私達はこれを自主ゼミと呼んでいます。自主ゼミの仲間は忘年会に私の家集ってくれました。桜の頃には花見の会をやったこともありました。子どもを連れてやってきてくれました。私の孤独感はどうしたグループ・メンバーとの交流により次第に癒されていきました。学生相談室長としての役割の行

動がいつの間にか私の生き甲斐になっていきました。

昭和五十八年、都立大学は定年となり、東京国際大学教授になってからも学生相談室長を続けました。前後二十年間、学生相談をしました。途中三年間、都立大学付属高校の校長をやっていた時も、登校拒否の生徒をクラス担任の先生から頼まれて、校長室でカウンセリングをやりました。学校に来られない生徒は私の自宅に来て話し合いをしたこともありました。登校拒否は直りませんでした。大検に合格しましたと母親から電話をもらった時は本当に嬉しい気持ちでした。こうしたことに心をくだいてやっていたのは凡て私の幼い頃の孤独感体験の裏返しとしての共感が基本にあったからだと思います。

悩みをもった学生・生徒に、少しでも援助できることが私の生き甲斐になっていました。

来談学生の中には父親との関係がうまくいかず、「お前は平均以下の人間だ」と言われ続けてきたので、「私は平均以下の人間でしようか」としつこく訴

えてきた学生もありました。

ある男子学生は、母がクリスチャンでストイックで教育熱心なためにそれについていけず、母との関係がまずくなり、「私は母を憎んでいる。殺してしまいたい」と手記に書きました。ところがこの母親は私宅まで相談に来て、何とか学校に行くようにしてほしいと訴えました。この学生は結局中途退学になってしまいました。

彼は小学校から高校まで私立の有名な学校に通ったのに……。親が教育に熱心であればうまくいくというものではない一つの事例です。

精神分裂症を病んで、それが治って復学してきたけれど、一般の学生とはしつくりいかなない学生が相談室に来て、無事に卒業するまで話し合いを続けたこともありました。

こうした沢山の事例にそれぞれ親身の対応ができたのも、その底に私の幼時体験があったからと考えられます。

(東京都立大学名誉教授)